

小松 歩 辻 雅士 上間 健造

徳島赤十字病院 泌尿器科

要 旨

症例は78歳女性。排尿痛と頻尿を主訴に当科を受診した。急性膀胱炎の診断で、抗生剤投与を開始したが改善せず、急性腎盂腎炎を併発した。カテーテル尿を採取しようとしたが、陰唇は正中で癒着し、pinholeを2箇所認めるのみだった。陰唇癒着症と診断し、腰椎麻酔下に陰唇切開術を施行した。術後、排尿状態は改善し、尿路感染も消失した。陰唇癒着症は、非常にまれな疾患であるが、女性排尿障害の原因として留意すべき鑑別診断の一つと考えられる。

キーワード：陰唇癒着症，高齢女性，陰唇切開術

症 例

患 者 78歳 女性

主 訴 排尿痛 頻尿

家族歴 特記すべきことなし

既往歴 口唇ヘルペス

現病歴 2003年5月頃から頻尿を自覚したが放置。7月28日から排尿痛が出現したため、同日、当科を受診した。検尿沈渣にて膿尿を認め、急性膀胱炎と診断し、同日よりlevofloxacinの経口投与を開始した。排尿痛は消失したが、膿尿は改善せず、8月4日から37.4度の発熱を生じた。急性腎盂腎炎の併発と診断し、cefazopam hydrochlorideの連日点滴投与に変更した。その後も、発熱、膿尿が持続するため8月8日、カテーテル尿の採取を試みたが、陰唇は正中で癒着しておりpinholeを2箇所認めた。(図1)

入院時現症

栄養状態は良好。37.4℃の発熱を認める以外、胸腹部に異常所見を認めなかった。



図1 外陰部所見
外陰は、左右の大陰唇が全長に渡って正中で癒着していた。

入院時検査所見

末梢血一般検査、血液生化学検査では異常を認めなかった。検尿沈渣で赤血球20-30/HPF、白血球>1000/HPF、尿培養では*Pseudomonas aeruginosa*が検出された。

以上の所見より陰唇癒着症と診断し、8月8日腰椎麻酔下に陰唇切開術を施行した。

手術所見

腰椎麻酔下に観察すると、pinholeは3カ所認めた。それぞれに、ゾンデを挿入し、pinholeが正中線にあることを確認(図2)。手動的剥離は困難だったため、左右陰唇の癒着部位をメスにて切開した。外尿道口、および膣口に異常がないことを確認し6-0 PDS



図2 手術所見
pinholeにゾンデを挿入し正中線を確認し切開。



図3 術後外陰部所見
外尿道口、膣口には異常は認められなかった。

にて全周性に縫合した。(図3)。術後に16Fr バルーンカテーテルを留置した。

経 過

術後経過は良好で、8月11日にバルーンカテーテルを抜去したが、排尿困難は認めなかった。尿路感染も cefazopam hydrochloride の投与で改善した。8月11日の検尿沈渣では異常を認めなかった。同日より levofloxacin の経口投与に変更し、8月12日退院した。

考 察

陰唇癒着症では、低エストロゲン状態が誘因となり、脆弱となった外陰部に感染・炎症・外傷などが加わり陰唇内面の表皮剥離が生じ、癒着が生じると考えられている。これに対し、陰唇癒合症は、androgen 過剰状態が誘因になるもので、副腎性器症候群や、半陰陽などが原因とされており、両者は区別されなければならない¹⁾。

陰唇癒着症は、小児の1～2%に発生すると報告されているが¹⁾、成人例での報告は少なく、本邦での報告例は40例にすぎない¹⁾⁻²⁾。

発症年齢は20歳から93歳と幅広く、小児例が無症状で発見されることが多いのに対し、成人例では排尿痛、排尿困難、性交障害などの症状を示す。また、尿路感染は成人例の75%に合併する³⁾。

鑑別診断としては、外陰委縮症、半陰陽、副腎性器症候群、陰閉鎖、尿道下裂などがあげられるが、本症では、陰核肥大を伴わず、癒着線上に pinhole を認めることが特徴とされている³⁾。

治療としては、成人例の場合、癒着が強固で陰唇切開術が施行されることが多いが、陰唇剥離術が可能な場合もある。自験例では、3カ所あった pinhole にゾンデを挿入し、癒着した陰唇を牽引することにより、陰唇正中の切開が安全に容易に施行できた。一方、小児例では薄い被膜性の癒着である場合が多く、エストロゲン軟膏の局所塗布が有効とされている。

術後の再発予防にエストロゲン軟膏の塗布やエストロゲン陰錠の使用が必要といわれているが、成人例では確立された方法ではない¹⁾。自験例の場合も、術後、再発予防の治療を行っていないが、経過は良好だった。

高齢者の増加に伴い、陰唇癒着症の報告は近年増加傾向にある。本疾患は成人例の場合、ほとんどの症例で排尿障害と尿路感染を認める。また、問診と診察で容易に診断が可能であり対処できる。

陰唇癒着症が、高齢女性の、排尿障害、尿路感染の原因として、留意すべき疾患の一つであることを銘記しなければならない。難治性の尿路感染の場合、基礎疾患の検討の重要性を再確認させられる症例であった。

文 献

- 1) 相澤 卓, 石橋啓一郎, 尾山博則: 高齢者に発生した陰唇癒着症の一例. 泌尿紀要 44:129-132, 1998
- 2) 小野隆征, 細川幸成, 鳥本一國: 陰唇癒着症の一例: 臨泌 56:435-437, 2002
- 3) 奥野紀彦, 村山雅一, 須山一穂: 排尿障害を主訴に発見された陰唇癒着症の1例. 臨泌 55:166-167, 2001

A Case of Labial Adhesion in an Elderly Woman

Ayumu KOMATSU, Masahito TSUJI, Kenzo UEMA

Division of Urology, Tokushima Red Cross Hospital

A 78-year-old woman was admitted with chief complains of miction pain. Urinary tract infection was detected by urine examination. She had severe labial adhesions with with two pinpoint opening. The adhesions were surgically dissected under spinal anesthesia. Labial adhesion in adult woman is very rare, but is important in the different diagnosis of female voiding disfunction and urinary tract infection.

Key words : labial adhesion, adult woman, labial discission

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 9 : 133-135, 2004
